

氏名	菅沼 文乃
学位の種類	博士（人類学）
学位記番号	人博甲第 12 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 21 日
論文題名	社会のなかで老いるということ ―沖縄県都市部における 老年者の選択と逡巡に関する人類学的研究
審査委員	主査（教授）森 部 一 （教授）坂 井 信 三 （教授）後 藤 明 （教授）西 江 清 高 （教授）伊 藤 眞（首都大学東京）

1. 論文の内容の要旨

本研究は、沖縄県都市部的那覇市に位置する主として辻地域で生活する老年者についての現地調査（2008年7月から2012年10月までの断続的調査）をもとに、現在の沖縄都市部に居住する老年者の老いをその行為から考察しようとするものである。

本論文は全部で7章から構成されている。まず、1章の序論では、老いに関する多様な研究領域がある中で、社会的老いを研究する立場に立ち、人類学分野と社会学分野の先行研究を取り上げて検討し、以下の三つの問題点を指摘している。①イギリス流の構造機能主義的視点からの老年者集団の社会的役割分析と、社会における老年者の位置づけ・地位を文化要素として捉えようとするアメリカの文化人類学の研究が人類学分野においては代表的であるが、これらの人類学分野の研究は「伝統的」社会への研究志向がとりわけ高いために、近代福祉導入をきっかけとする老いの社会化の変化についてはいまだ十分な研究がなされていない。②ポストモダン人類学以降の老年者をテーマとする民族誌的研究では、老年者が属する社会集団や老年者が構成するグループ・コミュニティに対する参与観察という方法が中心であったため、老年者個々人の生活の実態が明確に論じられてこなかった。また、社会学においても、社会システムの把握に重きをおくために、そのシステムが個人に及ぼす影響や、社会の中で活動する個々人の主体的な動きを看過してしまいがちであった。③三つ目は、研究対象に対する研究者の関わり方の問題である。社会学分野では、老年者を社会で保護されるべき社会的弱者であり、福祉を受ける権利をもつ地位にある者として設定するため、老年者を社会問題の当事者として固定してしまい、社会問題への対応としての福祉制度が老年者や社会に与える作用をさらに助長してしまうという問題である。

以上の問題点を踏まえて、著者は、社会的・歴史的背景によって規定される価値観や学術的言説から構築されてきた社会的老いと、現在を生きる老年者の実際の行動や活動を対比させる必要があると指摘する。前者に関する検討は、2章でなされ、後者に関する検討は3章から6章にかけてなされている。

さて、2章では、沖縄の社会的老いを規定する二つの側面を明らかにしている。まず、先行研究を用いて、従来の沖縄社会における社会的老いの様相を検討し、女性や老年者に霊的優位を認める宗教的価値観は琉球王府時代からの祭祀組織の各段階での原則に現れ、親族組織や地域共同体に浸透し、沖縄では、この宗教的価値観を通して、親族組織、地域共同体、祭祀組織の三つが相互に関連する構成を形成してきたと述べ、従来の沖縄の社会的老いは、それぞれの組織というよりは、各組織が関連する総体から提供されてきたと指摘する。例えば、成員の最年長者が親族組織の位牌継承や家庭内の日常的祭祀を担うという原則、老年者が地域共同体の司祭者の役割を務めるという構図である。このような形で、老年者は社会から役割を与えられ、社会に包摂されていたのである。次に、沖縄の社会的老いを規定する近代の福祉制度を第一期から四期に分けて検討し、結果として、福祉制度が「社会的に保障されるべき老人」という認識に具体性を帯びさせ、また、福祉を利用す

るという新しい社会的役割を老年者に与えていると指摘する。

続いて 3 章では、研究対象地である那覇市辻地域の特徴と従来の沖縄研究が研究対象としてきた地域の特徴との明らかな相違点に注目し、それを説明することによって当地域を概観している。一つ目の特徴は顕著な高齢化傾向であり、那覇市の高齢化率は県全体の平均を超えているが、辻地域は那覇市内でも際立って高齢化が進んでいる。二つ目の特徴は、那覇市内の中的那覇地区という対外交易の要点に位置していたことにより、辻地域は遊郭として発展したが、第二次世界大戦で辻遊郭が焼失し、戦後は米軍関係者向けの歓楽街として発展したことであり、また、その後、米軍関係者の足が遠のいたことやバブル経済の崩壊などによって歓楽街が衰退してしまったことである。三つ目の特徴は、戦後の混乱期に沖縄本島都市部で商業を営むために宮古島出身者が辻地域に多数移住し、移住者を中心とするコミュニティが形成された結果、地域共同体の継続性が分断され、地域と地域祭祀の間に乖離が発生したことである。つまり、宮古出身者達は、戦前より行なわれてきている当地域の祭祀に関与していないのである。

4 章では、現地調査で得られた情報に基づき、現代の辻地域の様相を検討し、従来の沖縄社会にみられた三つの社会組織（親族組織、地域共同体、祭祀組織）の連関が当地域で弱体化していることや、各組織の成員同士の関係の希薄化・形骸化を指摘している。その結果として、老年者に一定の社会的役割を与えることが困難となり、老年者を社会に包摂することが難しい状況が出てきているという。こうした状況に対応するために導入された福祉制度が老年者にどのように受け止められているのかを検討しているのが次の 5 章である。

5 章では、特に参加型の福祉を取り上げ、辻地域に設置されている高齢者福祉施設である「辻老人憩の家」とそこで実施されている参加型サービスの現場の観察と、そのサービスに関与している老年者からの聞き取りに基づいて、老年者が福祉サービスに多様な形で関与していることを指摘している。つまり、福祉サービスの現場に現れる老年者は、現住地で日常生活を送るにあたって、福祉制度が提供する新しいコミュニティに加入する必要性を感じていない。というのは、彼等は、福祉サービス導入以前から同郷であることや長年の居住経験に基づいて相互に社会関係を構築しているからである。したがって、彼等にとって参加型サービスは余暇の時間を有意味に過ごすための選択肢の一つであり、参加型サービスへの多様な形の関与は、彼等個々人の個別の経験と社会関係に基づく個人的な選択の結果である。また、上記したように、福祉サービスに参加する老年者は、サービス導入以前から相互に社会関係を構築してきた人々であった。そのため、当地域に居住しながら、そのような社会関係を構築していない老年者は、福祉サービスに参加しにくくなる。そこで、次の 6 章では、こうした福祉サービスに参加しない老年者に注目している。

6 章では、参加型サービスに参加しない 5 名の独居老年者（宮古出身者でなく、老後に単身で移住して来た者）を取り上げ、居住パターンに注意して彼等を低家賃アパート居住老年者と単独独居老年者に区分し、彼等の個人的な生活の場面に現れる老いに合わせた行為あるいは対応を検討し、以下の四点を指摘している。①短期滞在を前提とする低家賃アパー

ト独居老年者は、地域社会での関係や老年者同士の関係を構築していないが、単独独居老年者は、自身の家族・親族がしてくれるのと同じような援助を期待できる十分な人間関係を地域内に構築している。②低家賃アパート独居老年者である一人の人物の行為や対応から、ネガティブな「逡巡」と「選択」の繰り返しという要素を、他方、単独独居老年者である一人の人物の行為や対応から、自分の生活にとって都合のよい「選択」に至るポジティブな「逡巡」という要素を抽出している。③人間関係を構築する/構築しないという選択や、神事や手伝いを通じて地域内での社会的役割を獲得する選択や、住居を移る選択などの際に、独居老年者は老いと自身の生活に応じた様々な選択を行なっている。④5名の独居老年者は、参加型サービスに参加しない、つまり、高齢者福祉サービスを享受するという老年者の社会的役割を獲得しないという共通の選択をしている。

7章の結論では、1章から6章までの検討を踏まえ、辻地域の老年者の行為や対応に個人の選択という要素が強く現れるようになった背景には、従来の沖縄の社会組織間の相互連関の希薄化と、新しく導入された福祉制度が老年者個々人の抱える問題や希望にこたえきれていないことがあると指摘している。また、生活様式の変化と流動化は特に沖縄都市部において顕著であり、その不安定かつ多面的な状況の中で生きる老年者は葛藤にさらされやすくなっている。この葛藤に対して老年者は選択と逡巡によって主体的に対応し、老いを自分のものにしていくと指摘している。

2. 論文審査の結果の要旨

論文全体の構成はしっかりしており、先行研究のレビューと方法の検討も適切になされている。また、要点も簡潔に整理されていて読みやすい論文である。

また、高齢者研究に対する著者の総合的なアプローチも高く評価できる。従来の老いの人類学的研究は、伝統的社会における老年者、年長者の社会的役割を強調するか、さもないければ、「高齢者」という表現にもみられるように、高齢者を社会的弱者と捉える、社会福祉学的アプローチにひきずられる傾向があった。この点に関して著者は非常に自覚的であり、「高齢者」という語の使用は社会福祉政策の対象としての側面にとどめ、一般的な記述においては「老年者」という中立的な語の使用に徹している。このように方法的立場が明確であるからこそ、著者は、「社会的老い」を社会的役割規範と社会福祉対象という二つの位相において捉えることができ、さらに、現実にある社会的老いとは、個人が「選択」と「逡巡」という行為を通じて実現するものであるという主張を提示することが可能になったと考えられる。また、社会福祉に関する言説が支配する現代にあつて、「高齢者」というレッテルを貼られた存在としての自己とそのレッテル化に逆らいたい自己という存在の間で生きる、つまり、「社会的老い」の二重性の中に生きる我々の生のあり方を照らし出すという意味においても著者の方法的立場は優れているといえる。

著者は、那覇市の辻地域を主な調査地として選んだ理由として、当地域が那覇市において最も高齢化が進んでいる点をあげているが、著者の当地域に関する詳細な記述は当地域の特殊性をも明らかにしている。そして、その特殊性が当地域にやって来たよそ者としての宮古移民を受け入れやすくするとともに、宮古移民が形成する移民社会のもつある意味で脆弱な性格をも規定していると考えられる。著者の詳細な記述を通して我々は当地域のもつ歴史的、地理的、人類学的な意味での魅力を知ることができるのであり、その意味で、辻地域に関する著者の詳細な記述は優れているといえる。それに関連して、老年者との面談による著者の地道な資料収集も評価したい。

次に論文で物足りなかった点を指摘しておきたい。一つは統計的データの提示・活用の不足という点である。著者は、辻地域については統計データを提示しているものの、そのデータ提示は、当地域に限定されており、そこで示される数値が那覇市において、あるいは沖縄においてどのような位置を占めるかについては言及していない。統計データの活用により、調査地がもつ地域の特徴を周辺地域のデータとの比較を通して明らかにする作業も重要であることを指摘しておきたい。他の一つは、著者の参与観察の場に関するものである。著者の観察の場は、主として福祉サービス「辻老人憩の家」であり、また「低家賃アパート」である。そのため、老年者達の生活の一場面が切り取られているにすぎず、老いを生きる人々の生活全体がみえてこない。こうした点に配慮した観察がなされたならば、著者の主張する「行為としての老い」という視点がより説得力をもったのではないかと思われる。

以上をまとめれば、老いのあり方を二つの社会的老いの関係性の中で捉え、そこにおける多様性を選択と逡巡という位相において捉えようとする著者の試みは、大方において成功しているといえる。

なお、この論文は福祉政策に対する直接の提言を目指すものではないが、福祉政策が見落としてしまいがちな問題に対する視点を追求しようとするものであり、その点で社会福祉のあり方を考える上で、重要な基礎資料を提供しようとするものである。

平成 26 年 2 月 21 日

主査（教授）森 部 一

（教授）坂 井 信 三

（教授）後 藤 明

（教授）西 江 清 高

（教授）伊 藤 真（首都大学東京）